

宮沢賢治の童話「セロ弾きのゴーシュ」における音楽的な一考察
—ベートーヴェンの交響曲第六番「田園」と第九番「合唱」の精神—

台湾大学日本語文学科修士課程二年／黄 毓倫

【要 旨】

賢治作品を論じる時、音楽は欠かせない要素である。彼の生きていた時代には、岩手で洋楽が街に流れ始め、その環境で成長し、彼は洋楽愛好家になり、ベートーヴェンの音楽に愛着し、能動的にその精神を作品に織り込もうとしていた。ベートーヴェン音楽が世界全体の幸福を求める人類愛は、イーハトーヴォ理想郷を創ろうとし、皆の「本当の幸せ」を探し続けてきた賢治に、多大な影響を与えたのだろう。本稿では、賢治最晩年の童話の一つ「セロ弾きのゴーシュ」を手掛りに、推敲段階「第九交響楽」と最終形「第六交響楽」に焦点を当て、作中に現れるベートーヴェン音楽の精神、及び賢治の音楽に対する心得を探ってみたい。